



TITLE:

雑纂

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雑纂. 日本外科宝函 1939, 16(5): 901-918

ISSUE DATE:

1939-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/205112>

RIGHT:

## 纂 雜

### テオドール・ビルロートの書簡集から

ト 庵 老 生

23. 在バーゼル、ヒス教授に宛てゝ。

[1866年 慶應2年 (テュリヒより 37歳)]

『……回顧すると拙者がテュリヒ大學に在勤してからはや5ヶ年となつた。其間拙者は何をしてゐたのやら唯だ醫業だ、病人狩だ、腫瘍も切つた、骨も切つた、關節も切つた、切つた、又切つた。然しそれが何の爲めだつたか？其結果は如何だつたかだよ！考へて見ると多数の外科醫と云ふ者は暗中を手探りしてゐると云ふものだよ！……』

『……目下拙者は當地へ來てからの3300人の病人の病歴を整理してゐるだけで！そして調査した結果拙者は學生に2000回も環狀切斷の方式を教へ込んだ事になるが考へて見るとそれは全く機械的な仕事だつた。意味を無さないと云ふものだ。』

24. フランクフルト、ドクトル、アイセルに宛てゝ。

[1866年 慶應2年 (テュリヒより 37歳)]

註。ビルロートの助手であつたらしい。

『……君も知つてゐる通り拙者は政治問題には全く無關心な人間である。だからフランクフルト市が自由市であらうが普魯西亞領であらうがそんな事は我不關焉だ。…それから君は拙者が境國ウキン大學へ轉任の噂のあるのに對して祝賀の意を表してくれたが實は拙者はウキン行きは決して希望してゐないのだ。それには種々な理由があるのだ。其重なもののはあの老大國は最早活氣のない國だし國民は全く生氣のない民衆なのだからだ。それで實の處は拙者はライプチヒ大學へ行きたかつたのだが仕方のない運命となつたと云ふものだ。それで若しも君のゐるフランクフルト市に大學でも建設されるなれば拙者は好んで飛んで行きたいと思ふてゐるのだ。』

『……それから家庭の事だが近頃2人の小供が肺炎になつたのが幸ひ輕快したと思ふたら今度は小兒コレラになつたし、それが治つたと思つた所長女は百日咳となるし、それが治つたと思つたら今度は長男が猩紅熱で死んで了ふたし次いで長女が又猩紅熱に感染したと云ふ始末だ。實に今年は拙者の家族の厄年と云ふものだ。さて今後はどうなる事かなア。拙者も妻も暗い氣持でゐる。だから今年の冬は全く社交を避けて業務に熱中して此氣持を轉換するより仕方がないと思ふてゐる。が先年大金を出して買ふたピアノもこんな工合で手を觸れよう

とも思はない。……』

樂岡子！多くの小供を持つ家庭にあつては常に此苦痛がある。特に醫者は人一倍苦惱するものだから感傷的な B. 氏はさぞや面白くなかつたであらう。そしてウキン大學轉任も餘り面白く思はなかつたであらうがこないやな紀念のある土地から離れたかつたであらう。だから B. 氏がチュリヒ大學を去つてウキンへ轉じたのもこんな家庭の事情も手傳つたのであらうと思ふ。

## 25. 在チュリヒ、リュブケ教授に宛てゝ。

[1866年 慶應2年 (チュリヒより 37歳)]

註。教授はチュリヒ大學の美學史の教授であつて B. の親友であつた。

『……近頃拙者の氣持は甚だ鬱陶しい限りである。友人が病氣になつてゐるからだ。拙者は唯だリンドフライシュとヘツペの家族としか交際はしてゐない。全く孤獨だよ。それに近頃拙者の身體が着々肥滿してきたので脱脂療法をやらなければならないと云ふ始末であるし希望してゐたライプチヒ大學へは行けないし子供は死ぬし悲觀せざるを得ないではないか。それで幻覺症のある狂者にならないのが不思議な位だ。そして之は君だけに内證で云ふ話だがあれやこれやで一夜泣き明した事もあつた。考へて見ると拙者のライプチヒ會戰には大ナポレオンと同じく全く敗北したと云ふものだ。』

『……此8月頃から全く喫煙を止めたが何だか寂しくてどうもならないよ。それでやけになつて今度は大奮發をして2500フランの大ピアノを買ふた。然し買ふたには買ふたがあまり狂氣の様にそれに近づけないのも不思議である。……』

樂岡子！子供は失ひ希望の大學へは行けずヤケになつて大金を出して大ピアノを買ふたのも不思議ではない。

## 26. 在キール、エスマルヒ教授に宛てゝ。

[1867年 慶應3年 (チュリヒより 38歳)]

『……戦争になるかなア、愈々普佛開戦?? 拙者の考へでは最終には佛蘭西は負けと定まつてゐるではないか。それともルキ、ナポレオンの心の底には解つてゐる筈だと思ふから開戦とならずに當分一時平和の時代となるかも知れないが、兎に角にいざ開戦となれば普魯西亞軍の爲めに篤志救護醫班でも組織して志願軍醫になつて出陣しようとも考へてゐるが、さりとて拙者は獨逸軍醫にはなれないし拙者は奧太利亞國の爲めなら働かない心算だから、君が伯林で商議軍醫團でも組織するならば拙者は好んで伯林へ出掛るよ。妻も8ケ年も故郷の伯林へ歸つた事がないからよい機會だと思ふ。』

『……實は拙者がチュリヒに居るのは甚だ不安になつたのだ。それは之以上此處では働甲斐もないから37歳の人間としては活き甲斐がないと云ふものだ。拙者の年頃はもつともつと活

動すべき時代であつて此儘退化すべき年齢ではないと考へてゐる。……』

樂岡子！「男子の志は須らく四海を呑むべし」とは此の事を云ふのだらう。

27. ドクトル、アイセルに宛てゝ。

〔1867年 慶應3年（チュリヒより 38歳）〕

『……拙者のウキン大學招聘問題は長い間噂ばかりで睡眠状態と云ふてもよい！どうなる事やら？然し君！若しも拙者がウキンへ行くとすれば願はくばあの老大國があの儘維持してくれて不相變音楽家の大都市であつてほしい。』

樂岡子！其時代に既に氣力のない老大國と云はれてゐた 塊太利亞も72年後の今日分解作用を起して了ふたではないか。國も民族も人も物質も同じく化學作用が働いてゐる。此現象は既に三堺老先生時代にも現はれてゐたと云ふ話も老先生から聞いた事がある。

28. ヒス教授に宛てゝ。

〔1867年 慶應3年（チュリヒより 38歳）〕

『……前週はウキン大學へ招聘の事で頗る亢奮したよ！拙者をシュ教授の後任にしたいと教授會の決議があつたらしいが新教徒であつて且普魯西亞人である拙者をどうする心算なのだらう？拙者の胸裏にはどうしてよいか渦が卷いてゐるのだ！成程ウキンは世界的の大都市だ。仕事も多からうが従つて苦勞も多くなると云ふ譯である。然るに妻は唯だ譯もなく世界的の都會ウキンと云ふだけに懐けてゐると云ふ始末だ。行かうか行くまいか此處が思案の最中である。』

樂岡子！チュリヒ大學に7ヶ年雌伏した B. 氏が之から愈々ウキンへの入城となる譯であるが之によりて B. 氏が將來世界的外科の大家となり又世界的の名譽を博する階段に上つて行く事となつた。そうして B. 氏の學問上にも生活上にも豪華の舞臺となつてくる序幕である。此時のウキン大學教授會の内幕を同學のピータが B. 氏に書いてゐる。曰ク

『1867年3月16日が教授會の日であつた。その議題は、「實地外科の敏腕家然も將來生理學及び病理解剖學上の研究に有望にして且大家であり然も手術にも熟練にして又文筆の才を有する偉材にして現代的新進の學力を具備し我が塊國の爲めに世界的大名を博してくれる人の選舉の件」と云ふのである。恐ろしい註文付の選舉投票であつた。此時ロキタンスキー教授とリュブケ教授が大いに力瘤を入れてくれたのとブラウ學長の力も與つて11對17と云ふ投票で大勝利だつたよ！。早く來給へ來給へ。……』

29. 在ストツトガルト市、リュブケ教授に宛てゝ。

〔1867年 慶應3年（チュリヒより 38歳）〕

『……とうとうウキンに入都する事となつたよ！ウキンは君も知つてゐる通り市民は遊び暮

してゐる豪華都市なのだ。勉強も勞働もしない「なまけ」者の集團である。だから生活費はべら棒に高いので拙者の家庭の生活が案じられてならない。妻は唯だ譯もなく 嬉しがつて勇氣を出して家計の切り盛りに盡力すると云ふし拙者がチュリヒ市は種々の事情で嫌氣がさしてゐる事と知つてゐるので遂に2人で決心してウキンに行く事にした。それで拙者は當分伯林の土地を踏めない事になつた。少く共在伯林の親族の半分の人々が死んで了まふ年月間は音信不通の覺悟だ。……』

30. 在ストツトガルト, リュブケ教授に宛てゝ。

[1867年 慶應3年 8月5日 (チュリヒより 38歳)]

『……荷造りだ! 荷造りだ! 包む巻く, 走る又走る。一枚の手紙だつて探すに大變だ。荷造の爲めに上を下へと騒動である! さよなら瑞西よだ! チュリヒからウキンへだ! 2週間後にはウキンへ入城だよ。』

31. 在ストツトガルト, リュブケ教授に宛てゝ。

[1867年 慶應3年 (ウキンより 38歳)]

『……此處は妙な都だよ。凡ての人も, 事業も目標と云ふものがない! 其日暮した。そして獨逸と埃太利亞との間に掛け橋がない。そして獨逸學派に對するつまらぬ憎惡の根性を持つてゐる所なのだ!』

『……大學外科臨床科では300人の學生に教授せなければならぬし, それには材料が少ないとあるからどうする事も出来ない。拙者はまるで争闘の爲めにウキンに來た様なものだ。凡ての點に就て改良の爲めの争闘である。腹が立つて仕方がないよ! 僅かに臨床手術室を建て、貰ふのに3ヶ月も辛捧しなければならぬのだつた。其他の事は押して知るべしだ。此處では凡てが辛捧だ! 然し大學外の仕事も多忙であつてとても文筆などを持つ違もない。毎夜午前2時でないと就床出来ないと言ふ多忙さだよ……。』

樂岡子! 然し此多忙と云ふ中に B. 氏の音樂狂が愈々燃え上つたと見えて芝居, 音樂會又音樂會へと熱中もしてゐたらしいから B. 氏は其方面にも多忙であつたらしい。

32. 在ウキン, ドクトル, ヅュブリンに宛てゝ。

[1868年 明治元年 (ウキンより 39歳)]

『……リスター氏法による寒性膿瘍の切開の事に就ての君の報告は讀んだ。

註. Joseph, Lister, s antiseptische Behandlung der Abscesse 1867.

拙者は以前骨髓炎合併のものを多く切開した事があつた。其手術の方式が多く報告されてあるが何れも駄目で其結果はよくなかつた。皮下切開, 排膿管, 沃度注入等々して今度はリスター氏法となつたが其都度拙者は種々な方法をやつて見たが結果は何れもよくなかつた。だ

から拙者は経験に依りて切開はやらない事にしてゐる。だから Lister の新式切開法だつて飛びついてはいけなひぞ。拙者は此方面では保守主義だ。……』

樂岡子！ B. 氏の書簡集の中に始めて Lister の名が現はれて來た。此時分から所謂 Lister 氏防腐法の論争の舞臺となつたらしい。蓋し Lister が其防腐法を公にしたのは1865年であるから其の4年後で今日から70餘年前の事である。

### 33. エスマルヒ教授に宛てゝ。

[1868年 明治元年 (ウキンより 39歳)]

『君まア一寸聞いてくれ給へ。……拙者の俸給がやつと家賃の支拂が出來ると云ふ状態だ。ひどいよ。物價は恐ろしく高いし生活難だよ。幸にして内職と講座給で食つて行けると云ふものだ。一體奥國政府は何と考へてゐるのか。大學の經濟制度などは100年來まるでなつてゐないよ。無茶ぢや！……拙者は「腫瘍」に就て一講座を設けたが300人の聴講生があるし臨床科には250人の聴講記入生が出來た。此地の大學醫科の學生の總數が1200人と云ふ事だが多くの者は都會に集中するから奥國の地方の大學は哀れなものだ。然しウキンでも聴講生の數は多いと云ふても其大部分は不拂であるし教授の俸給は少ないから止むを得ず内職へ走らねば生きて行けないと云ふ状態だ。だから理想もなければ主義もない。我利々々になるより仕方がないではないか！』

樂岡子！ それは70年前のウキン大學だけではない様である！今日醫者は商賣人であり又醫業も商業となつてゐる。仕方がない！

### 34. 在キール大學, エスマルヒ教授に宛てゝ。

[1869年 明治2年 (ウキンより 40歳)]

『拙者の年俸が4000グルデンに昇給されたが、其れが爲めに拙者は一人前の人間としての生活が出來るやうになつたと云ふ譯ではない。然もウキン大學外科の設備は少しも改善せられないのに腹が立つが仕方がない……それから拙者の内職からの収入は伯林のランゲンベックやウキルムスとはとても比較にはならないがそれでも1868年(明治元年)には1ケ年に14000グルデンの収入があつた。それで拙者が芝居見物とか音樂會とか舞踏會の方面をもう少し節約すれば確かに愉快に生活して行けると云ふ事になつた。』

『……前年度に拙者は20000グルデンを生計の爲めに支出した事になつてゐて人間として可なり愉快に暮せた譯だがこんな事では行末が案ぜられる。もつと社交界から遠ざからないと駄目だとは思つてゐる。』

『……ウキンには有名な Oppolzer も居るし Skoda, Rokitsansky も居るが拙者は其名前さへ知らない位だ。彼等は皆70前後の老人だから聽てぼつぼつ死んで行く人々なのだ！ 實際なん

かした事もない。老人と若い人間とは話が合はないよ。』

樂岡子！外科は外科，内科は内科，東と西と何時でも方角が違ふ。

### 35. 在キール大學エスマルヒ教授に宛てゝ。

[1869年 明治2年 (ウキンより 40歳)]

『……もう2週間で夏期休暇だ！暑い暑い！塵芥の多いそして暑いウキンである。1日中通風設備のない手術室で働いてゐるのはまるで奴僕同様だよ！ 夏期休暇が生命の洗濯と云ふものである。拙者はウキンから半時間の距りのある田舎に住んでゐるが毎日々々其日の精神的苦勞に悩まされて疲勞し切つて家路に急ぐだけだ。そして妻子の顔を見るのがせめての慰めだ！そして夏期休暇が來たが君は何處へ行くか？ 海岸へか？ 拙者は Innsbruck へでも行きたいと思ふてゐる。……』

樂岡子！B. 氏の豪華版が愈々現れて來た。音樂，ダンス，芝居だけではない。夏期には避暑とくる。寒ければ避寒と來る……豪さらに云ふてゐた獨逸人 B. が半ば音樂的に墮化した様にも考へられるではないか！

### 36. リュブケ教授に宛てゝ。

[1870年 明治3年 (41歳)]

『……會議……會議……會議又會議！何を議論してゐるのだ！つまらない！愚だ！蓋し人間と云ふものは健全なる理解と相互救助の精神さへあればよいのだと思ふ。然るにウキンの都會人は亂舞してゐる。音樂に狂じてゐる。そして楽しさうに酔拂つてゐる。聽て其後に來るものは宿醉だけだよ。……』

樂岡子！斯う言ふてゐる B. 氏も亦後年少々宿醉氣分に苦しんだらしいのも面白い。それは後の話である。

### 37. 在ウキン妻に宛てゝ。

[1870年 明治3年 8月1日 (41歳)]

註。此時歐洲は普佛戰爭の舞臺となつた。出征，出征！徵集！徵集の時代である。獨逸では普魯西亞王 ウキルヘルム，佛蘭西では ナポレオン三世，片や ビスマルク，モルトケ，片や マクマホンだ。一六勝負だ。Der Wurfel ist gefallen, der Strum ist Los! の時代となつた。此時 B. は篤志救護軍醫團の團長として出掛けた時である。

『……俺はやつと ミュンヘン 迄來たよ。それ迄は何等故障はなかつたがさて此から ストットガルト 市へ行くには列車のダイヤが正しくないのである。機會を利用して俺は アウグスブルヒ から ウルム へやつて來た。雷雨の夕方であつた。軍隊輸送の列車は市の外側を走つて行くが何處から何處へ行くのか誰も知らない。此處は戰場に近いが戰況は少しも解らない。通信は遅延の上に遅延する。昨日獨逸の皇太子軍の本陣が Speier 市まで前進したと云ふ事を聞いた。

多分バーテンの南方地方で兩軍の衝突があるらしい。そして佛軍が此處まで前進して來るのに幾重かの獨逸を打ち破らなければ來られないから駄目だらうよ。そして此地方では獨逸の敗戦などは誰一人も考へてはゐない。それはウルムと云ふ都市は南方獨逸の最大強固の要塞地だからだ。』

『……俺はハイネ教授を探し出して聞いて見ると此處では救助醫者團などは不必要な話であつた。それは私設の野戦衛戍病院の軍醫組織が完備してゐるからと云ふ事だがこんな事務的な官僚的な事は馬鹿な話だ。纏て大戦争でもあつたらどうなるか、考へて見るがよい。それに Dr. Brunns がウエルテンブルヒ軍團の軍醫長になつてゐるから俺は其處へ割込む事も出来ない始末である。それでまア大戦争のあるのを待つてゐるより仕方がないのだ！ 今日では獨逸が勝つか？ 佛蘭西が勝つか？ 俺には少しも解らない。……』

樂岡子！ 軍醫に非ず且獨逸人から見ればたとへ外科の大家であつても奥國所屬の B. は外人軍醫部隊であるから餘り豪らさうに出来なかつたらしい。

### 38. 妻に宛てゝ。

[1870年 明治3年 8月5日 (ハイデルベルヒより 41歳)]

『……まだ大戦争が始まらないが國境線で前哨戦があつた様に聞いた。昨日カル、スルー及びカスタツト地方では殷々たる砲聲が聞えたと言ふ事だ。少なくとも獨軍はライン河を越えて佛蘭西國境へ進撃してゐる事だけは確からしい。近い中に大戦争があるぞ!!』

『……此地では兵隊の姿を見る事が少ないのは大部分が戦場近くへ繰出してゐる爲めであるらしい。唯々驚くべき程大量の物資輸送だ！ 牛……牛……穀類！ それに 其他の種々なる軍用輸送物資の山だ！……ファルツ地方から 40 萬の兵隊が出動された様にも聞いたが其地方を旅行した者の話によると 兵隊の姿も見えなかつたと云ふ事だから戦況は少しも解らない。又此地では 400 人の負傷兵の爲めにはチャンと準備は出来てゐるし、又隣地のマンハイムなどでも同様な準備がしてあるやうに聞いてゐるが 凡てが全く秩序整然としてゐるし又頗る静閑であるのに驚いた。然も此地は國境から僅かに 3 マイルしか距つてゐないのに敵軍が進撃して入るとは誰も思ふてゐない様である。』

### 39. 妻に宛てゝ。

[1870年 明治3年 8月6日 (エルサス州, ワイゼンブルヒより 41歳)]

『……俺は之迄色々の事を見たと面白旅行をして來たが今日は最も面白かつたよ……昨日 8 時頃におまへに手紙を書いたが其 5 分間も経たない中に獨軍が此處ワイゼンブルヒ市にやつて來たので愈々忙がしくなつたよ！ そして今夕既に獨軍が前進するから俺等もマンハイム市へ進軍だよ！。マンハイム市には 負傷兵も居る様子だ。今日始めて 敵軍の捕虜列車が通過



したのを見た。その中にトルコの軍人も居つた。それでマンハイム市は愈々活潑になつてきた。そして聞く處によればワイセンブルヒには多數の敵味方の負傷兵が居るが1人の醫者も居ない様子だ。だから俺等は軍隊列車に同乗して其處へ前進する事となつた譯である。……昨晩はランタウ市に着いたが宿泊所を得るのに苦勞したよ。何でも敵の爲めに破壊されたが鐵道は昨夜の中に普魯西亞軍の工兵隊が修繕したさうだ。そしてワイセンブルヒに来て見ると成程戰蹟歴然たりだ。此處にも彼處にも馬の屍體……人間の屍體、そして軍服等々の散亂だ。そして寺塔も屋根も門も全く破壊されてゐるし停車場へ行つて見ると負傷兵と捕虜と軍隊とで大混雜をしてゐる。何分にも俺等は貨車にゆられて遠路を來たものだから身體綿の如く疲れたと云ふものである。そして此處に到着して見ると醫療救護隊の整然たるには一寸驚いた。こゝには既にヨハニター救護團又其他の救護團がちやんと出張してゐるのには些か面喰つたよ。……こんな小都市に300人の負傷兵が居るのにたつた4人の軍醫より居らないので俺は即時其全部の野戰病院の統制に乗り出した。だから當分前進せず此處に居らうと思ふてゐる。實は戰線をあちらこちらとろつき廻るのは勞多くして功が少ないと云ふものだ。……それで俺は多數の醫者を集めて篤志救護團を組織した。其大部分はグライフスワルト大學出身者だし又多數の看護手も集めたよ……Dr. Czerny (B. の助手) に100人の負傷兵治療と救護を委任した。そして彼は即時必要なる手術を始めたよ。俺の本部は此地の醫者の宅で其妻君も親切に立働いてくれてゐる。……此處では凡ての人が獨逸語を話してくれるので甚だ便利と云ふものだ。……午後になつてから戰況が解つて來た。それによると敵將マクマホンの軍團が全く撃破されて敗走中だとの事で之で獨軍がストラスブルヒを占領した事になるし、佛蘭西の右翼軍が駄目となつたと云ふものだ。萬歳……萬歳だ。俺は今日午前11時から午後5時迄立ちつくめで大いに疲れた。……何故手紙を書いてくれないのか？ 家族は全部健全なだらうなア……。俺も聽て忙がしくなるだらうよ。……』

#### 40. 妻に宛てて。

〔1870年 明治3年 8月12日 (ワイセンブルヒより 41歳)〕

『……ウキンを出てから今日で恰度2週間になる。そして家郷から音信のないのが寂しいと云ふものだ。どうしてゐるか!? 1週間も新聞と云ふものを讀まないからさつぱり解らないが戰爭が獨逸軍の爲めに大いに有利に發展してゐる事だけは確かだ。然し流言又流言が盛んにあつて真相がさつぱり解らないが少くとも俺等は今佛蘭西領内に居るのだが兵隊などは1人も見ない。唯だ驚くべき多量の軍需品満載の貨車の間斷なき通過だけだ。之は戰場に居る兵隊の爲めのださうである。……俺は作業を大いに愉快にやつて居る。お前の送つてくれた繻帶材料は大いに役に立つたよ。そして俺の救護團の病舎はまるで大學臨床科と同じであつて之迄俺の學問の不足を補ふ爲めには大いに利益になつてゐると云ふものだ。……それから此地の

住民も全力を擧げて助力してくれるし妙な不利な流言蜚語などを信ずる者は1人だつて居らないよ。噂に聞いてゐたトルコ軍人の殘忍性の事も 餘り信じられる事ではない。忙がしいので頭が一ぱいだ！ 手紙なども書く餘裕もないぞ！。8月4日以來の新聞を送つてくれないか！ 俺の身體は頑健だから心配するなよ！……』

41. 妻に宛てゝ。

[1870年 明治3年 8月17日 (ワイセンブルヒより 41歳)]

『……やつと一昨日おまへの手紙も電報も受取つた。俺は終日負傷兵の繃帶交換、手術又手術、後送又後送で忙がしいが然しそれだけだから仕事の單調な生活には退屈してゐるよ！……俺は俺の病舎を模範的軍事病舎にしようと努力してゐる。……新聞を送つてくれい！ 此處では新聞などは1枚も得られない始末だから世間の事も戰況も少しも解らないのだ！ 今日聞いた事だが獨逸皇太子軍團がメツツに進軍してゐると云ふ噂だ。昨日 スタインメツツでは佛軍が散々に敗北したのは確からしい。……するとナポレオンは孤立の位置に置かれたと云ふものだ！ 不相變軍需品滿載列車の通過だ。それが晝夜引きりなしに此地を通過してゐるが何處へ運ばれるのか解らない。昨夜はその騒音で一睡も出来なかつた始末だつた。……何でも噂によると獨逸では國民軍の徴收だと云ふ事だが其秩序整然たるには驚いてゐるよ。……』

42. 在伯林 グルト (Gulrt) 教授に宛てゝ。

[1870年 明治3年 8月18日 (ワイセンブルヒより 41歳)]

『……ウルムス市を除いて南部獨逸軍の爲めには南獨逸大學の臨床家が全部出動とあるから獨逸の外科教授連は多分他方面に出動する事となるでせうなア。拙者は……若しも戦争が永引けば拙者の軍陣醫學上の意見書を陸軍省に書かうと思ふてゐます。が兎に角に此處ワイセンブルヒ市は萬事頗る整頓してゐる事だけを通知します。……』

43. 妻に宛てゝ。

[1870年 明治3年 8月20日 (ワイセンブルヒより 41歳)]

『……俺の外科の仕事はまだ減少しないよ！……不相變兵隊列車と糧食列車の連續だ。Dr. Czerny (助手) は全力を擧げて働いてゐるよ。俺は朝7時から夜の9時半迄勞働だ。そして大學生と看護夫が俺の助手となつてゐるが此地で外科醫と云へば俺等の仲間だけだ。……空腹になると麵類一碗だけだ。うまいよ！ こんうまい味は未だ嘗て知らない位だ。……俺は獨逸の負傷兵に遇ふとトルコ軍人の慘忍性の事が本當の事かと何時も尋ねて見るが2,3の異例はあるとしても凡てのトルコ人が噂の如く慘忍性の持主ではないらしい。元來俺の之迄の經驗によるとトルコ人は教育はないにしても其大部分はまるで子供の様な可愛い人間だよ！ そして彼

等は多く望郷病に罹つてゐるのは 勿論だが外科手術の事になると全く無知だから恐怖心を抱いてゐるので取扱ひが容易でないと言ふ事だけだ。それに 衣服がないのと 氣候が違ふので寒さにふるへてゐるよ！可哀さうになア。……』

#### 44. 妻に宛てゝ。

[1870年 明治3年 8月21日 (ワイセンブルヒより 41歳)]

『……戦争の先途はもう見通しがついたぞ。そして巴里の包圍戰となるにしてもそれは短日月には現出しなと思つてゐる。……エルサス州の住民こそ氣の毒だ！ 嘗ては大佛蘭西國の一國民であつた者が一朝にして獨逸國領となるのだから 妙なものだ。そしてそれを獨化するには5年や10年はいふと考へなければならぬ。それには住民の間の言語が獨化せなければならぬのが第一義だよ！ 今日では百姓でも商人でも家僕でも誰1人獨逸語を解せないからなア。……そして今日では此處に鰯、薰肉、シェリー、ポートワキン等々も入つてくるよ。何れもハンブルヒから來るのださうだ。俺等だつて兵隊と同じく働くにはそんなものも必要だよ。唯だ麥酒がないので D. 氏へ麥酒を送れと電報を出したよ。……』

#### 45. 妻に宛てゝ。

[1870年 明治3年 8月30日 (ワイセンブルヒより 41歳)]

『……今俺の病舎には107人の負傷兵が居るが其治癒の成績には大いに満足してゐる次第だ。そして後送！ 後送だ！ そして俺の此地の生活には何も苦痛はない。馬車の1臺も持つ様になつた。勿論夏期休暇と言ふ程ではないが安穩だ。……戦争の先途に就ては心配するに及ばないぞ！ 俺は戦争はモルトケとビスマークの2人に任して 置けばよいのだと考へてゐる。此際奧太利亞人に何が出来るかい！ 俺は心の中で笑つてゐるのだよ。……明日はマンハイム市へ歸らうと考へた處へ半時間の中に800人の負傷兵がやつて來たと云ふものだ。仕方がないよ。それに毎日毎日2000人位の捕虜列車の通過とある。忙がしいよ！ 之から急いで紅茶を一椀！ そして急いで停車場へだ。……』

#### 46. 妻に宛てゝ。

[1870年 明治3年 9月14日 (マンハイムより 41歳)]

『……近日に戦争が濟むと云ふのか?? それが近々に 濟むか濟まないか 誰1人知るまい。如何なる條件の下に兩國の間に平和が結ばれるかが問題なのぢや。それを俺は知る由もないぞ。之迄はモルトケに任したが 之からはビスマークに任すより仕方がない。負傷兵などは最早俺を刺戟しなくなつたのは餘りに多過ぎるからあきあきしたからだよ。……俺は此處で抑も人體の全身の何處彼處と云はず人間の凡ての部分の 鐵砲傷も 取扱ふた。それも全軍の負傷兵から見れば 僅かな一部だけだがそれでも 數千人の鐵砲負傷者を見たのもうあきあきした。蓋し

軍陣醫學と云ふものは全醫學の一小部科であつて頗る單調なものだ。……若しも巴里及び南方佛蘭西でまたまた合戦があるとすると凡ての負傷兵はまづ此處マンハイムに集中する事になるのだが？……』

47. 在ストットガルト、リュブケ教授に宛てゝ。

[1871年 明治4年 (ウキンより 42歳)]

註。此時普佛戦争終結して B. 氏はウキンに歸つてゐたらしい。

『……拙者の様な肥満した脂切つた然も健康な身體の持主を狭い露路へ追込んで出られない様にするとは一寸ひどいよ！ 然しそれは決して愚痴を云ふのでないが君も知つてゐる通り拙者は永久に内面的不安感の持主なのだ。然し既往を考へて見ると俺の能力不相應に今日の如く社會に於ける位置と業績も出来たと云ふのが全く妙だと考へてゐる。然し俺が社會に於て如何なる高い位置に置かれても如何なる幸運な關係にあつても決して俺を永續的に幸福を感じしめないだらうよ！ 蓋し永續性の幸運な環境を考へると云ふ事、その事が既に精神的自殺と云ふものだ。現在では俺は外科教授とか 宮中顧問官などと云はれてゐるがそれは半ば偶然になつたと云ふものであるし、又それだつて何の意味がある？ 俺は毎半ケ年間全く異つた人間生活がして見たいのだがそれが出来ない。と云ふのは全く運命だよ。だからせめては拙者の家族共及び友人達から悲しまれて最終の呼吸を引取りたいと思ふてゐるし眞面目な葬式でもやつて貰へばそれで満足するよ。……』

樂岡子！ B. 氏が急にこんな氣分を親友に書いた事情に就ては解らないが元來 B. 氏はこんな氣分の持主であつたらしい。蓋し B. 氏は性來頗る感傷的の性分でもあるが不平からでもなく不満からでもなく實は餘りに業務に學問研究に忙がし過ぎたからではあるまいかと思ふ？！

48. 在バーゼル、ヒス教授に宛てゝ。

[1871年 明治4年 (ウキンより 42歳)]

『……Furor Teuronicus! (日耳曼人の嵐) だ獨逸國が永久に政治的に無力になるか？ 或は強大なる獨立國となるか？ 一六勝負だ！ Kampf ums Dasein と云ふものであつた。……が戦争の永引く事と其方式に就ては悲しむべき事ではないか！ 蓋し「國民的怨嗟」と云ふものは決して調和されるものではない。特に佛蘭西側から考へたら正に左様だ。然し獨逸側としては其の欲するものを得たのだからその感情は消滅しただらうよ。……獨逸では唯だ獨逸帝王主權に充奮してゐるだけであつて國民統一などはまだ少しも考へてゐない。況んや國際的共和政體などと云ふ土臺などは少しもないではないか！……獨逸だつて當分は之でよからうが此上には一寸の土地だつて擴げる事は六ヶ敷からう。そして差當り歐洲の天地は平穩だらうし又エルサス・ロート・リンケンにしても半世紀位の間だけはまづまづ熱狂的獨逸黨であるだらうが

其後に來るものは何だらうか。政治論は之で止めだよ。拙者は此世の人間から見れば忘恩者の 1 人なのだ。他人からは幸福に 充ち満ちてゐると云はれてはゐるが其本人である拙者は凡てを有難がらなければならぬのにどうも反對に感傷的になつて仕方がないよ！ 型にはまつた學問の研究と教授の職務はまるで 舊教の布教團の人の 様なものだ。此責任と義務と云ふ鐵鎖に縛せられてゐる様な氣がしてならないよ。……此世にはもつともつと僅少な材料でもつともつと偉大なる業績を遺してゐる偉人があるではないか！ 拙者は是等の偉人に對して大いに恥すべき氣持がするよ！……現代の外科學と云ふものは全く昔時とは違つた立場に置かれて了ふたと思ふのは個性に對するとか個人に對するとか云ふ意味は葬り去られて了ふて唯だ技工だ、技工だけだ。其技工だけを見て其技工者を少しも考へないではないか……君の戦場に於ける體驗談も聞きたいよ。愚痴は止めだ。唯だ前進！ 前進！ 凡ての汚物をはねのけて前進する事だよ！ 活體が活物を生むのではないか。……』

樂岡子！ 西も東も今時も昔時も同じ事である。西洋でも東洋でも永遠の平和などは望まれるだらうか？ 凡ての生物は生存競争の中に生きてゐるのが大自然の原則である！ 凡ての生物は互に食ふか、食はれるかだ？ Kampf ums Dasein！ だ。ダウキンは豪い奴である！ 卜庵の政治論も亦止めである。特に日支事變下にあつては尤も然りであるまいか！

#### 49. 在ゲツチンゲン、バウム教授に宛てゝ。

[1872年 明治5年 (ウキンより 43歳)]

『……先生！ 伯林で外科學會が開設せられる様に聞きました。それはフオルクマンとシーモンの盡力でせう。

註。1872年4月1日ランゲンベックの首唱によりてはじめて Deutsche Gesellschaft für die Chirurgie が設立された時の事である。

私は此種の集會には餘り興味を持つて居りません。實は抑も私は外科醫であり乍ら外科の踏臺がぐらぐらしてゐる様な氣持がしてゐるのです。私は臨床科に於て「治療」と云ふ方面になると内心大いに疑點があるのです。そして誰かゞ私の耳へさゝやく様に感じられてならないのは「オイそれでよいのかい？ おまへのやり方はそれで正しいのかい??」……だから今後はそんな集會の席上で怒號するよりは寧ろ相互に内證で意見の交換をしたり又相談する方がよいと思ひます。先生の企畫せらるゝ外科専門大學の設立の事ですすがそれに就て私も不賛成ではありませんがさて政府が之が爲めに資金を出してくれるか否やが大なる疑問であります。……私の考ふる所によれば現在の大學の制度は昔時の遺物でありまして學者は學者相應に待遇せられてゐない様であると思ひます。其の制度の改良は未來の時代を待つより外はないと思ひますが私の考へでは大學と云ふ學堂は純學問的に存在して決して現時の様に社會の爲めとか政治とかの爲めの存在であつてはならないと思ひます。……Stromeyer は近頃一文を書いて大い

に外科的治療法の撰擇とその教理化を唱へてゐました。それも仲々六ヶ敷しい事だと思ひます。例へば此處に一の外科的治療方式が出来るとしますと多くの人々は忽ち其方式へと駈けて行きます。そして忽ちそれに就いて「理論」を作らうと腐心しますが又忽ちにして其方式も理論も新方式と新理論によりて破壊されて了ふと云ふ状態ではありませんか！例令、角膜の神経末梢に就ては數十年かゝつて研究しても徒勞であつた事を Cohnheim が現はれて數分間にやつて除けますと又 Virchow の細胞病理學が飛び出して来る始末でありました。又 Recklinghausen やら Cohnheim が多年にわたつて顯微鏡にかちりついてやつてゐた事の一小部分だけが本當の事となつて其他の大部分は塵埃となつて捨てられて遂には仕方なしにまた生活體に就て再検討もし又熟視せなければならぬ事となつてゐます。だから「眞理」は何處にあるかど云ひたいです。……「眞理」なるものは金貨を數へる様に數へられるものではないと思ひます。勿論私は若い人達の熱心な研究と會合には信頼して大なる敬意を表しますが「獨逸國外科大學」の建設の爲めにはとても一緒になつて踊り出せませんから何卒一個の外國人として其通信會員として加入さして下さる事を御願ひします。Stromeyer は大學教授職を去つて軍醫總監になつたさうですがそれは彼として行くべき道だと思ひます。軍醫と云ふ役は矢張り官吏と云ふ連鎖の一つであると思はれます。……此處ウキンでも 4 人の退役軍醫總監と 120 人の退役大臣が居りますが役にたかないと斯様に片づけられて横ツチョに据ゑられて安樂に生活出来ますから私だつて生涯の安樂を欲するなら教授職を止めて軍醫總監とか大臣とかにでもならうと思へば確かになれると思ひます。……』

樂岡子！B. 氏は獨逸帝ではあるが既に半壞化して兎角獨逸の同學の人々とは合流出来なかつたらしい。そして内心大學制度の改良を夢みながらその實現にも餘り熱心でなかつたのは奥國の政治經濟又は學界の事情がその實現不可能である事を知つてゐたのではあるまいか。

#### 50. 在ライプチヒ大學、ヒス教授に宛てゝ。

[1872年 明治5年 (ウキンより 43歳)]

『……勿論拙者は贅澤生活はして居らないが拙者の家族共は此處ウキンで可なり便利に生活してゐる。それは拙者の内職収入の御蔭と云ふものだ。政府などはとてもとてもそれだけの収入を代償してくれない。……仕事と音楽と云ふ事に嚴然たる區別さへして居れば都會生活も決して悪いものではないよ。……勿論拙者の技術を実地上に應用する事の善惡利害の問題は解らないが拙者は元來つましい性質ではないし又拙者の技術の全部の力を使用してゐると云ふ譯ではない。元來拙者は何か失敗でもすると恐ろしく悲哀觀が湧いて來る性質なのだ。だから時々こんな場合に外科を止めてやらかとも考へる時があるが實地醫者をやつてゐて猶且學問研究に従事する事が出来るであらうかは甚だ疑はしい問題であるのだ。……實地醫者と云

ふものは種々雑多な社交關係に縛られて居らなければならないから時には充裕し時には悲哀の氣持が出てくる。だからと云ふて實地の仕事も今更止められないと云ふ始末だ！然し短日月でもよいから實地醫者の仕事から遠ざからねば生命が持たぬ氣持もする。……』

樂岡子！1ヶ年幾萬グルデン以上の収入がある身柄となればとても止められまい。面白いのと苦しいのと兩面の挟み打ちである。

# 51. 在ライプチヒ、ヒス教授に宛てゝ。

[1873年 明治6年 (ウキンより 44歳)]

『……今年の8月にはカールスバードへも入浴に行つたしオステンドへ海水浴にも行つたが一般に近頃は以前よりは萬事に引緊つて唯だ研究に没頭してゐる。音樂も餘り熱狂せないよ。そして唯だ色々の題目に就て書いてゐるよ！まづ

Über Lernen und Lehren der med. Wissenschaft.

だ。それは獨逸だけの事ではなく世界諸國の事柄の調査から初めなければならないから大きな仕事だ。それから博物學一般に就て演繹的にそして又歸納的に書かうと云ふのだから之も事だ。Kantの「純理性批判」を読んで見たが解らない。だから拙者の頭の中は目下まるで引白の内容の様なものだ。それに誰かがやつて來て毎夕12時迄ピアノを弾じてくれるから其後の12時から2時迄が拙者の仕事の時間と云ふものだ。……今丁度2時鳴つた、頭痛がする、仕事は止めた。……』

樂岡子！音樂に熱狂せないと云ひ乍ら矢張毎夕ピアノを聴かなければ承知せなかつたらう。

# 52. 在ミュンステルリンケン、ドクトル、カンペレルに宛てゝ。

[1874年 明治7年 (ウキンより 45歳)]

『……拙者の外科年報と云ふ船は出航してから滿3ヶ年になるが一方では之は不治の病氣につき纏はれてゐる様な氣持だ。然し又一方では之が爲めに拙者の智識の啓發ともなつてゐると云へる。が之から如何なる事か？自分自身のやつてゐる事が解らない程馬鹿な事はないよ！……』

樂岡子！兎角人生は斯様なものであるまいか？義務責任に追ひ廻されると苦しい。然しそうでないと又寂しいものである。

# 53. 在バーゼル大學、ゾチン教授に宛てゝ。

[1874年 明治7年 (カールスバードより 45歳)]

『……此夏にオステンドに來ないかと云ふが行くかも知れないが未定だ。若しも關節神經症と云ふものがあつたとしてエスマルヒの云ふ様に海水浴で治るなら行くよ！一體關節神經症

なんて云ふ病氣は何か？拙者は知らないよ。君は Lister 氏法 によりて此病氣を治さうと考へては居るまいなア。攝護腺肥大症も リスター消毒法で治ると思ふてはゐまい。……オステン  
ド海水浴には石炭酸は使用せまいなア。若し使用するとせば高度な食鹽含有で忽ち中和され  
て了ふよ。こんな冗談はさて置き當分14日間は本を書かない事にしてゐるから寧ろ此處カー  
ルスバードへやつて來ないか?!』

樂岡子！B. 氏は最初リスター消毒法に大反對者であつた事は世人の知る事である。それでこんな冗談を友人に書いたものらしい。

#### 54. 在ライブチヒ、ヒス教授に宛てゝ。

〔1875年 明治8年（カールスバードより 46歳）〕

『……此夏も不安だ、いらいらしてゐる。それで夏期休暇にカールスバードへ静養にやつて來たが、どうも静養が出來ないよ。毎日々々訪問客だ！諸國からの同業者同學者が來るわ來るわだ。其中には面白い人もある。親切な人もある。然し多數はうるさい人達だ！愚問愚答！嫌になつて了ふた！近い中に北海岸のヘーリングスドルフへでも遁げて行かうと考へてゐる。』

有名になると多忙になる。無名であると寂しくなる。西も東も此世の中はうるさいものと覺悟召されよ。樂岡子！

#### 55. 在ケルン、マツクス、ミュレルに宛てゝ。

〔1875年 明治8年（46歳）〕

註。ドクトル M. Müller は有名な生理學者ヨハンネス、ミュレルの長男であつて此時ボン大學の外科に勤務してゐて或る病例の處置に就ての相談に對する返事である。

『……君の云ふ腫瘍は手術せない方がよからう。たしかに確實なる手術は出来るかも知れないが其場合には病人は「死」だよ！又不確實な手術をすると創が治癒せない内にたしかに再發するに定つてゐると思ふ。拙者の臨床科へも多く斯様な腫瘍患者がやつて來た。そして随分切除して見たが駄目であつたから此頃は腫瘍の手術に就ては疑問を抱く様になつてゐる。そして沃度、硝酸銀、金、石炭酸、錫等の實質内注射もやつて見たし又電氣分解法もやつて見たが唯だ病狀を悪くするに過ぎなかつた。……だから近頃 Czerney が考へ出したハウレル氏丁幾の注射でもやつて見るもよいが其結果は知らない。( ) は此方法を 2, 3 の病例にやつて結果がよいと云ふてゐるがどうだかなア。又1人の此種の患者に數週間持續的に氷嚢を置いてやつたら其腫瘍が半分程小さくなつたので退院したら 2, 3 週後に死亡したと云ふ事だから此方法も駄目と云ふものだ。又同じ患者の3例程病理解剖して見たが肺、肝、脾へ轉移さ！無力！醫術の無力だ！』

樂岡子！之は今日より64年前の話である。今日の醫學醫術はどうしますか？老人の知つ



た事ではないが樂岡子は強力な視線で射つぶしてやろうと考へ中だと聞きましたが成功を祈ります。

56. 在 ストツトカールト, リュブケ 教授に宛てゝ。

〔1875年 明治8年 12月 (ウキンより 46歳)〕

『……俺は近頃頗る怠け者になつた。本を読むのも嫌やだし書くのも飽きたし何をするのも嫌やだ！然も雑務と云ふ汚物をローばい含んでゐるので何とかせなければならぬが、君は毎日 4、5 時間仕事をするのがつらいと云ふ事だが俺ももう少し奮發せなければならぬと思ふてはゐるが駄目だ。然し斯様に強制的な無意味な生活も時には悪い事ではないと思ふてゐる。……君も煙草を始めて見たらどうぢや……一服やると一寸氣持が變つて来るぞ……夜も不眠症で困つてゐるさうだが其經驗は拙者にもある。あれは困りものだ！神よ憐み給へだ！リス……次週にあの有名な音樂家の Liszt が ウキン に來る事になつてゐる。入場料が 20 グルデンだ。だが聴かずばなるまい！』

57. 在 ストツトカールト, リュブケ 教授に宛てゝ。

〔1875年 明治8年 (ウキンより 46歳)〕

『……俺もとうど少しは人間らしくなつたぞ。家も美しくなつたし子供は生長するし……外部で醫者として色々の苦勞はあるにしても此處には種々な音樂會があるのだ。それが随一の楽しみなのだ！人間と云ふものは唯だ氣持一つと云ふものだ！馬鹿な事だ！世人は俺の作業の精力盡大なるに驚いてゐる様だがそれは馬鹿者の考へ方だ！俺から文筆の仕事と研究の仕事を受ふたら俺の船は錨のない難破船と云ふものだ。……一度俺の新築の家を訪れてくれなうか？！立派だぞ。美しい庭園があるぞ。然し驚くべき出費になつて了ふた。』

樂岡子！貧弱な牧師の俸が 46 歳に至つて愈々豪華生活が始まる事となつた。ある鐵道線には特に ビルロート 停車場と云ふのが設置されて、音樂會又音樂會、招客又招客の日が続いたのは此時代であつた。此時の収入はいくらあつたか老生は B. の金庫迄は調べては見ないが有名なる大家となつてゐたから収入も中々多かつたに相違なからうと思ふ。

58. 在 ベルリン, ランゲンベツク 教授に宛てゝ。

〔1875年 明治8年 (ウキンより 46歳)〕

『……Geheimrath 閣下！今年の外科學會へ御招待の榮を被りました事は實に光榮の至りと感謝します。……然る處小生儀は第一に新邸宅建築の爲めの監督をして居りますし、第二に小生の長女の教育は是非共獨逸國で施したい爲めに近々荊妻が ウルツブルヒ へ行く事となりますので家族の留守居になる爲めと、第三に目下業務に多忙である爲めに此地を離れて伯林へ參る事は如何にも不可能の情況であります。依つて失禮乍ら御斷り致したいと存じてゐます。……

承れば Hüter 氏は學問上不安な氣持らしいです。同氏の考案による血清の淋巴管内注射を伯林の學會で供覽される様ですが私はそれが何の目的の爲めの注射であるか了解に苦しみす。……』

樂岡子！嘗つてランケンベツクの門弟であつた B. は其師との關係餘り深くはなかつたらしい。其原因は知らないが半壞化學人と純獨逸學人との師弟の間の何か事情のわだかまりでもあつたのであるまいか？それとも年齢の相違か？（此時 L. は65歳であつた）遠慮からか？解らないが兎に角に敬遠主義であつたらしい。

59. 在ハルン、フオルクマン教授に宛てゝ。

[1875年 明治8年（ウキンより 46歳）]

『……拙者の10年來の経験より得たる「創傷外科」の治療に關する體驗に就て多少卑見を述べて見たいと思ふ。そして目下流行してゐる防腐外科の問題にも關係がある。

- 1) 石炭酸中毒による死の歸轉の事だが其爲めに8日間吐血して死んだ例がある。
- 2) 石炭酸海綿使用の爲めに擴大された皮膚壞疽の3例がある。
- 3) 切斷末端が豫想外に組織剝離とか哆開を來す事。

等々の例がある。君はそれを少しも有害ではなく臆ては治癒すると云ふてゐるがそんな場合には局部の組織が微弱ながらにぼつぼつ治癒するものと考へたい。拙者は2, 3度乳房切除の場合に失敗した事を覚えてゐる。それは折角腸線糸で縫合したのに其腸線糸が48時間も経たない内に消滅して了ふて創面が大口を開けた事もあつた。君は Lister 氏法には餘り反對でない様だが拙者は此方法は全く山師的のものだと考へてゐる。尤も Lister の個人的人格を害する氣持で云ふのではない。』

樂岡子！Lister が石炭酸消毒法を公にしたのは確か西曆1865年であるから（日本にしては慶應元年）1875年は既に10年を経過した後の話である。そして然も10年後に於ても其贊否の論争のあつた事を今日から考へるとおかしな様な氣がする。然し笑ふてはいけない！先人の研究と苦心の跡を考へるべきではあるまいか。

60. 在ハルン大學、フオルクマン教授に宛てゝ。

[1875年 明治8年（ウキンより 46歳）]

『……拙者は多くの種々なる缺點の持主なのだ。……特に拙者の主なる缺點は餘り多方面に心を配る事であつて如何でもなれと云ふ心持になれない事である。だから伯林とかウキンとか云ふ大都會の人間の渦卷の中を泳ぎ廻るには不相應に過大な勞働をせなければならぬと云ふ事になるではないか。疲れる。弛緩する。だから都市に於て眞人間らしい生活は何處にあると云ひたいのだ。こんな馬鹿な話はやめだ。……拙者は毎學期手術の方は助手に漸次まかせ2週に1回だけ廻診する事にしてゐて唯だ助手が思ふ通りにならないものだけを診療

する事にした。だが乳房切除後の創面だけでは興味がある。そして凡て怪しい事には手出をせない事にした。……或は狂氣の様に研究するか？或は狂氣の様に俗人の渦巻の中を泳ぎ廻るか？二つに一つだよ。だが他人が平氣でゐればゐる程拙者は反對に暴れ廻りたくなる性質だ。それは多年拙者の腦に強い刺激を受けた結果だと思ふ。だから君！君も餘り働き過ぎてはいけないよ……仕事によりて麻痺すると云ふ事は考へものだよ君！明日18歳の少女の子宮纖維腫に施す手術の方式の改良法を考へてゐるが君から注意の點も顧慮する心算である。クロールチンク液は使用して居らないが此應用法は Lister 氏法よりは以前から知つてゐたから數年前に助手をして研究させた事もあつた。……拙者は Lister 氏法の缺點も知つてゐる。が凡て完全無缺と云ふ方法には拙者は餘り興味を持たないよ。今後 Lister 氏法は如何なるかなア……明日の子宮纖維腫切除の爲めに開腹術をやらねばならない事になつてゐるが心配だ。あの Péan 氏の光輝ある同様な手術の成功には腹が立つのだ。拙者は3回程子宮剔出に大失敗したのを覚えてゐる。其3回ながら死の歸轉だつた。……拙者には Lister 氏消毒法による手術應用法はまだ試験中なのだ。其試験の時期がすむまでは矢張舊式の方法でやつて見る心算である。……』

# 61. 在フライブルヒ、チエルニー教授に宛てゝ。

[1875年 明治8年 (ウキンより 46歳)]

註。此時代には嘗つて B. の助手であつた Czerny は既にフライブルヒ大學外科教授になつてゐる。

『君も知つてゐる通り拙者は子宮剔出には開腹術は餘りやらなかつたのだが其後30回も開腹術をやつて見たよ…そして此問題に就いて非常に興味ある Péan の著書を読んでから大いに勇氣が出て來た。實は纖維腫のある婦人生殖器の全剔出法を之迄3回もやつて見た。が其最後の病例は今日から11日以前の事であつたが今日までの経過は良好だ。莖は殆んど剝脱したよ。』

『……ヘガール (Hegar) は (フライブルヒ婦人科教授) 拙者の大膽な卵巢剔出手術を傍觀して居つたから其病例の経過に就いて或は興味を以てゐるかも知れないと思ふから傳言してくれないか。それはあの病例に腹腔の化膿は舊式による完全なる創面の縫合によりて豫防が出來たと云ふ事だ。又其數日後同様な病例があつたので今度は Lister の雲霧法應用の下でやつて見た。然るに8日間と云ふものは不斷の吐血と血便と血尿で死の歸轉をとつた。然も其血尿は6日目に現出してきて尿中に石炭酸の著明な化學的反應があつた。無論石炭酸中毒だよ！それでまた石炭酸雲霧法は中止して舊式でやつて見たが3例ながら経過は良かつた。……』